第26回戦争遺跡保存全国シンポジウム
横須賀おっぱま大会

戦争遺跡の保存と平和への思いを地域に根差して継承活動に展開しよう
～ペリー来航の地、近代日本出発点となった横須賀から～

2023年9月16日(土)17日(日)18日(月・祝)
場　所 横須賀市追浜コミュニティセンター
参加費 一般1日¥1,000 障がい者1日￥500

昨年の広島大会に続く第26回戦争遺跡保存全国シンポジウム大会を神奈川県横須賀市で開催します。

横須賀には、幕末に近代化の嚆矢となる横須賀製鉄所が明治になると横須賀造船所となり、日本は近代社会へ歩み始めました。やがて横須賀鎮守府が設置されるとその直轄造船所、さらに横須賀海軍工廠となって海軍の重要拠点となりました。一方、陸軍が首都東京を防衛するための東京湾要塞の建設を始めると、沿岸部には多くの要塞が築かれました。

横須賀市の北部に位置する追浜では、明治末に海軍が水上機練習所として海岸を接収、大正初年に初の水上機飛行を成功させると1916年に横須賀海軍航空隊開設、1932年には海軍航空廠(1939年海軍航空技術廠に改称・改組)が設置されました。1926年には埋立により追浜飛行場(約15万坪)が完成して、海軍航空発祥の地、海軍航空のまちとなりました。なお「予科練(海軍飛行予科練習生)」の始まりも追浜でした(1930年)。

戦後、連合国軍に接収されていた海軍航空隊や海軍航空技術廠の用地は、1950年旧軍港市転換法により主として工業用地となり、現在日産自動車、住友重機等の企業が活動しています。追浜の軍施設は、産業施設や公共施設に転換される中で元の姿を留めるものは少なくなり、市街地の中にあったと言われる地下壕も、その後の宅地開発等で失われていきました。貝山緑地に残る地下壕は、横須賀市内でも唯一市有地に存在する地下壕として許可を得て見学することができましたが、2011年3月東日本大震災以降安全性への懸念から立ち入りが禁止されました。しかし、追浜地域の住民から、重要な歴史遺産として安全を確保した上での公開を求める声が上がり、横須賀市による整備工事を経て2021年より見学可能となりました。また東京湾第三海堡のコンクリート構造物の保存が困難となった際にも、追浜地域から声が上がり、現在の夏島都市緑地に移設されて、地元団体が中心となって保存・公開されています。

しかし、こうした活動には多くの課題があります。追浜では、戦争遺跡が、地域住民の生活圏から離れた場所にあるため、広く認識されているとは言えません。また活動を担う層は高齢化しており、なかなか世代交代が進みません。そこで、自然環境、歴史遺産、地域の産業などさまざまな地域資源を活かした「地域まるごと博物館」の活動に倣い、日常の生活圏に戦争遺跡があって戦争と平和について考える機会がある、という姿を展開する中で次世代への継承を実現したいと考えています。次世代への継承は、多くの地域で課題になっており、本大会でも各地の取り組みに学びながら、ご参加の皆様とともにより良い方法を模索したいと思います。

ロシアのウクライナ侵攻に見るように世界では戦火が収まらず、国内では国家安全保障戦略の転換が図られるなど平和について改めて深く考える事案が続いています。海軍航空技術廠で開発された特攻機「桜花」に携わった三木忠直は、戦後、今度こそ戦争のためではなく平和のために技術を使いたいと、新幹線等の安全性の追求に貢献したと伝えられます。

戦争の記憶の継承が、ヒトからモノへと移行しつつある中で、戦争遺跡の保存と継承の重要性が増しています。第26回戦争遺跡保存全国シンポジウム横須賀おっぱま大会では、「新たな戦争遺跡はつくらない」ことを念頭におきながら、戦争遺跡の保存の現状や当面する課題を明らかにしつつ、相互に交流を深め、調査、研究、公開、継承の活動を発展させることができるよう、皆様のご参加を願っています。

主催　戦争遺跡保存全国ネットワーク
第26回戦争遺跡保存ネットワーク全国シンポジウム横須賀おっぱま大会実行委員会
後援　横須賀市　横須賀市教育委員会　神奈川新聞社　タウンニュース社
一般社団法人横須賀市観光協会　貝山地下壕保存する会　追浜観光協会
おっぱまはっけん倶楽部　追浜連合町内会(予定)